
言葉のない国

I ?love?book

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

言葉のない国

【Nコード】

N3773Z

【作者名】

I?love?book

【あらすじ】

おばあさんが言った。

「いいかい、今から話す事はこの国に伝わる古い伝説だよ。」

「昔々、この国にはまだ言葉や文字がなく、人々は自分の気持ちを伝えることができなかった……」

〜1日目〜

おばあさんが言った。

「いいかい、今から話す事はこの国に伝わる古い伝説だよ。」

「昔々、この国にはまだ言葉や文字がなく、人々は自分の気持ちを伝えることができなかった。」

「ある日、2人の旅人がこの「言葉のない国」にやってきた。

1人は大きな男で、もう1人はスタイルが良い女だった。

大きな鞆を1人ずつ持つていて、こんな話をしていたんだ。

男「おい、この国は噂通り言葉がないんだな。」

女「ホント不思議ねえ、リク。」

男「そうだな、アイ。」

人々は聞いた事のない音を聞いてとつてもビックリしたそうだが、でもね、リクとアイの話は止む事がなく、人々はどんどんパニックになっていったんだ。

人々の様子に気付いた2人は、

リク「なあ、アイ。もしかしたらこの国の人達は俺らを嫌ってないか？」

アイ「違うわよ。この国の人達は言葉というものを聞いたことがないから」

ただ、戸惑っているだけよ。」

リク「そうか…。」

アイ「だから、そんな気にしなくてもいいのよ?」

リク『ああ。』

と言い、しばらく無言になった…。
沈黙を破り、話し始めたのはアイだった。

アイ『何考えてるの？ リク。』

リク『ん、ああ。どうすればこの国を変えられるかなあ…って。』

アイ『なあ〜んだ。そんな事考えてたの？』

リク『そんな事ってなんだよ！』

アイ『まあまあ、落ち着いて。』

リク『フンッ！』

アイ『これは私の考えなんだけど、この国を変えるには

ここににいる人達に言葉を教えればいいのよ。』

リク『…。どうやって？』

アイ『ん〜…。たとえば、ジェスチャーでみんなを集めて

学校みたいに1から教えるとか？』

リク『…一応やってみるか。』

アイ『でも今日はもう日が落ち始めているから、明日実行しまし
よう。』

リク『そうだな、じゃあ今日は寝床を探そう。』

アイ『…野宿は嫌よ。』

リク『そんな事言っても、言葉がなかったら泊めてもらうのは無
理だろう。』

アイ『そうだけど…。』

リク『じゃあ、ベンチの上ならいいだろう。』

アイ『それならいい。』

そうして2人は、道のそばにあったベンチの上で1日目を終了し
た。』

く2日目く

「そして2日目、リクとアイはベンチの上で目を覚ました。
…国の人々に見つめられながら。」

つまり、2人は日が高く昇ったところに目を覚ましたんだ。

リク「何で俺たちの周りに人が集まっているんだ？」

アイ「さあ？」

リク「俺たちが珍しいからかな？」

アイ「たぶん、そうじゃない？」

でもこれだけ人が集まっていれば、学校が開ける^{ひら}わね。」

リク「ああ、そうだな。」

アイ「じゃあ早速始めましょうか！」

リク「おー！」

突然、大きな音がしたので人々の中には逃げ出してしまう人がいた。

残った人たちも2人に寄ろうとはしなかった。

リク「& a m p ;アイ「……。」

アイ「大声出しすぎちゃった？」

リク「たぶん……。」

アイ「学校開けるかしら？」

リク「やれるだけのことはしてみよう。」

アイ「そうね。」

2人はまずベンチから立ち上がり、「こちらに敵意はない。」と
ジェスチャーで伝えた。

人々は最初は頭を傾げたが、少し時間をおいてから分かったような態度を示したんだ。

その後、
リクが

リク 「僕たちはみなさんに言葉を教えたいのです。」

と言ったが、人々には伝わらなかった。

アイ「言葉を教えるって大変ね…。」

リク「そうだな。」

アイ
あ！

リク「何かいい考えがあるのか？」

アイ「ええ、言葉が伝わらなくても音楽なら伝わるんじゃない？」

リク『なるほど…』

アイ「さっそくやってみましょう！」

リク
了解。

そう言ってリクとアイは自分達の鞆からトランペットとフルートを
取り出した。

みんな不思議そうに近づいてきて2人の周りに集まった。

アイ「じゃあ、いくわよ。」

リク
Ok!

アイ&リク
せーの！

アイ&am p:りク
?
?
?
?
?
?

?

2人はとても美しい音色で国中を満たしたんだ。
人々は初めて聞く美しい音に聞き入っていた。

やがて音楽が終わると、盛大な拍手が起こった。

リク『どうやら、大成功みたいだな。』

アイ『やったー！』

リク『嬉しそうだな、アイ。』

アイ『ええ、もちろんよ。リクは嬉しくないの？』

リク『もちろん嬉しいさ！』

アイ『それは良かった。』

で、これからどうする？』

リク『そうだな、この国の人達は音楽が好きな様子だから…』

アイ『音楽を教えながら、言葉も教える！…でしょ？』

リク『俺が言おうと思ってたのに…。』

アイ『まあまあ、いいじゃない』

リク『ハァー…。』

アイ『じゃあ、他の楽器も出しましょう！』

リク『そうだな。』

2人は鞆から クラリネット・ホルン・ユーホ・トロンボーン・
アルトサクス などなど

色々な楽器を出し、人々に見せた。

人々は色々な物が入っている鞆に興味を示した。

それに気付いたリクは、ゆっくりと

『かばん』

と発音した。

人々の中の1人は

『 か、か ばあ う？ 』

と言った。

リク『 ！ アイ！今この人が…！ 』

アイ『 ？ 』

リク『 喋ったんだ！ 』

アイ『 えっ、嘘！ 』

リク『 うそじゃないよ！ 』

アイ『 やったわね！ リク！ 』

リク『 ああ！ 』

そうしてリクとアイは1日中人々が興味を示した物の名前を教
ていったんだ。

日が暮れてきて、辺りが暗くなる頃にはヘトヘトになっていた。

リク『 今日は疲れたな。 』

アイ『 そうね。 本当に疲れた…。 』

リク『 … 寝るか。 』

アイ『 ええ。 おやすみなさい、リク。 』

リク『 おやすみ、アイ。 』

…2日目もまたベンチの上で眠りに落ちた。」

～3日目～

「そして3日目の朝。

リクとアイは人々に「あいさつ」や「気持ち」など、昨日教えていなかった言葉を熱心に教えていた。

リク「アイ、この国の人達は物覚えが早いな。」

アイ「ホント教えがいがあるわ。」

リク「そうだな。」

アイ「この様子なら明後日ぐらいにはこの国とお別れね…。」

リク「明後日!? 早すぎないか?」

アイ「だって、あまり長くここに居すぎたら別れが辛くなるじゃない。」

リク「…。」

アイ「私だってここから離れるのは寂しいわよ。でも…でも

!」

リク「分かった、じゃあ明後日までにいっぱい思い出作ろう!」

アイ「…うん。」

そうして2人は、また人々に言葉を教えていった。

人々はそれを興味津々に聞いていた。

そうして言葉を教えてもらった人達は

「みんな リクとアイ お礼 したい。」

と言ったんだ。

それを聞いた2人は

『 よろこんで！ 』

そう声をそろえて返した。
人々は

『 準備 する。 明日 まで 待って？ 』

と言ったので

リクとアイは『 いいよ。 』と返した。

人々は嬉しそうに肯き、さっそく準備を始めようとしていた。

アイ『 ねえリク。 この国の人達は優しいわね。 』

リク『 そうだな。 』

アイ『 それで、私いいこと思いついたんだけど…。 』

リク『 ん？ 何だ？ 』

アイ『 あのね、私たち言葉は教えたけど

この国や人々に名前をつけてないじゃない。 』

リク『 そういえば、そうだな。 』

アイ『 だから、お礼をしてもらった後に

みんなに名前をつけようと思うんだけど… どうかかな？ 』

リク『 いいと思う。 俺も手伝うよ。 』

アイ『 ありがとう！ 』

リク『 じゃあまずは国の名前を決めないと。 』

アイ『 そうね…。 言葉に関係してたほうがいいんじゃない？ 』

リク『 ああ、それじゃあ 言葉の国 っていうのはどうかな？ 』

アイ『 そのままね（笑） 』

リク『 でもいいと思わないか？ 』

アイ『 うん。 そのままだけど、シンプルでいいと思うわ。 』

リク『じゃあ決定！』

そうして国の名前を決めた2人は

一番積極的に話しかけてきた女の子には「セツ」

7歳ぐらいの双子には「リア」と「イク」

国の長老には「チョウ」など、特徴から名前をつけていった。

いつのまにか日が落ちて、あたりが真っ暗になると

2人は昨日までと同じように、またベンチの上で眠りにおちたんだ。
」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3773z/>

言葉のない国

2011年12月21日18時50分発行